

成瀬仁蔵と社会事業学部の創設

田端 光美

Jinzo Naruse and the Establishment of Social Work Department

Terumi TABATA

はじめに

成瀬仁蔵の研究はすでに研究会をはじめ、多くの研究が発表されているが、社会事業学部創設に関しては従来取り上げられることは少なかった。そういう筆者も、戦後間もなく社会保障・社会福祉を学ぶ目的で、それがそこにあるとして本学に入学、教員として定年を迎えるまで五十年を女子大の屋根の下で研究を続けながら、創立者成瀬仁蔵に尊敬の念こそあってもとくに研究したことはなかった。気持ちが動いたのは所属する日本社会福祉学会が、二千年ミレニアム大会は日本最初の社会事業学部を創設した日本女子大学を開催校にしたいとの申し入れを受け入れたこと、又、それを機に社会事業学部創設に至る成瀬仁蔵の思想、理念について、社会福祉学科教員と共有したいと考えた。そこで関係分野の教員の協力も得て、「日本の社会福祉発達と本学社会事業学部創設の意義に関する研究」を総合研究所の研究費助成を受け、二年間にわたって討議し、報告書をまとめた。

本稿は基本的にはその研究に依拠しているが、改めて成瀬が米国留学中、及び帰国後、どのような教育理念のもとに社会事業学部を設立したかを明らかにし、厳しかった戦中、戦後を越え、日本の社会福祉の礎石を築いたことに注目する。

I. 成瀬仁蔵の女子高等教育構想と社会事業学部

戦後、間もなく新制大学になった時の社会福祉学科学科長は哲学者の菅支那であったが、その著書に「出会いの論理」がある。人の出会いはまさに人さまざまであり、成瀬は青年時代に出会った沢山保羅からキリスト教の影響を受けたことは既に多く語られているが、神学研究のためにボストンのアンドヴァー神学校に留学した。そこで、神学校の中心で活躍していたウィリアム・タッカー教授に師事し、深く影響をうけたのである。

タッカーは著名な社会学者でもあり、アメリカの社会福祉にも多くの影響を与えた学者であったので、成瀬がリベラルアーツを学び、さらに、キリスト教は教会に留まるのではなく社会的な活動の実践もするという思想は、タッカー自身の設立したアンドヴァー・ハウス（セトルメント）において学ぶ機会を得ている。

すなわち、成瀬にとって第二の出会いはタッカーと、タッカーを通じての新しい研究者、実践者、そして友人との広がりである。それは若き日の成瀬の構想を大きく育てる糧になり、女子高等

教育の構想、開校について多くの助言や協力を得ている。

若き頃の成瀬は「女子教育者になるか、社会事業家になるか」と迷ったといわれるが、アメリカ留学中に当時アメリカで主流であったプラグマティズム社会学に共感し、社会改良に一層、関心を深めたことに注目する。さらに、アメリカでは家政学は科学であることに共感し、女子も高等教育は従来の婦女教育に留まらず、社会の単位である生活の改良であり、それによって社会を改良する専門領域であると認識する。したがって、社会事業教育は単なる職能教育でなく、その基盤に深い信念と創造力を培うリベラルアーツを基本的理念とした社会事業学部が、本学創立20年後の大正十年(1921)、日本最初の社会事業学部として開設された。

ちなみにこの時期、大正期はイギリスなど先進諸国は慈善救済から博愛事業への近代化が進んでいた時期であり、その影響は日本でも政府に救済事業調査会が設置され、救済事業は救貧から防貧への近代化が始まっていた。しかし、庶民の生活は第一次大戦後の好況のもとで物価は上昇、低所得層の生活は困窮して、歴史に残る米騒動など社会問題も深刻であった時期である。

II. {時期は今や正に熟しきった} - 麻生正蔵と車の両輪のごとくに

(1) 成瀬の社会事業教育の理念を継承して

社会事業学部創設に協力した第一は、本学設立に際し同志社大学から招聘された学監の麻生正蔵である。麻生は成瀬を継いで第二代校長になるが、社会事業学部創設に関する構想は成瀬が病床をやむなくされた最後まで、車の両輪のごとくに進められ、女子大学校開校から二十年をへた大正十年、社会事業学部は「時期は今や正に熟しきった」として創設された。構想を具体化するには多くの学者、実践者、宗教人の協力があつた。

二代目校長に就任した麻生はまず名称について社会学部か、社会事業学部かと意見を求めた。生江孝之、山室軍平、留岡幸助など、社会事業関係の中心的指導者は社会事業学部を、東京大学の社会学教授、戸田貞三、綿貫哲雄や新進気鋭の社会政策学の永井亨らは社会学を支持提出したが、最終的には麻生校長が実践的視点を強調する社会事業学部決定した。

どのような教育内容を具体化するか。カリキュラムの編成はいかにするか。当時の国内の社会的要請に応じて児童保全科と女工保全科の二科が設置されたのは、成瀬の女子高等教育の理念を実践するものとして、全国から理想に燃えて駆けつけた初年度学生は六四名、卒後はその活躍で女性の新しい道を開いたといえよう。当時のカリキュラムをみると、上記の生江孝之はじめ、当時第一人者といわれた教授や実践者たちの出講で、今日にも通じる充実したカリキュラム編成であった。

大正一〇年九月二七日、社会事業学部開設のニュースは朝日新聞夕刊に「社会事業を女性で・・・研究に努力する女子大学」や、東京日日新聞に大きく報じられたという。各地から「新しい学問へのあこがれ」、「保育所の開設など社会事業への情熱、期待を抱いて六四人が入学した。

(2) 本学社会事業学部の特徴と社会的意義

大正中期には本学社会事業学部創設とほぼ時期を同じくして、とくに宗教系の大学で社会事業講座が開かれている。主な例はキリスト教系では、同志社大学文学部神学科、明治学院大学、仏教系では大正大学社会事業科、そのほか東洋大学教育社会事業科などがある。

これらの中で本学の特徴は、第一に、創立者、あるいは創立主体は宗教にかかわらず、教育機関としては宗教組織から自立し、独自の設置目的によって開学された大学である。その点では東洋大学も同じである。

第二は、女子高等教育の体系の一環に位置づけた教育を目標としている。すなわち、単なる職業教育あるいは専門教育に限定することなく、その基礎に人格教育、とりわけ深い信念、創造力のある社会的人格を目標にして、リベラルアーツ教育を基本にしている。

以下の説明は、当時の家庭週報に掲載された社会事業学部新設の理由である。

- 1) 日本が要望する社会事業は国家も民間も社会事業家の養成を必要としている。
- 2) 従来の慈善事業は、今日大きな社会的仕事となり、仕組みも複雑、専門化し、専門的教育を受けた熟練者を必要とする。
- 3) 社会事業は男女双方に適する仕事であるが、女性にはこれまで以上に評価されてよい社会的役割を含む。
- 4) 本学ではすでに桜楓会事業として託児活動など社会的貢献の実績がある。

〔「家庭週報」第33号大正10年10月7日から抜粋略文〕

このような特徴は、日本の社会事業がようやく「慈善から社会事業へ」のステップを踏み始めた直後に開設され、時代が要請する多くの人材を輩出している。

Ⅲ. ファシズム下で {社会} と名のつくもの受難の時代

一九三一（昭和六）年、満州事変が始まったころから、日本の軍国主義はますます色濃くなり、キリスト教はじめ、社会改良、社会事業など、社会と名のつくものはすべて左翼、社会主義、すなわち危険思想であるとレッテルを貼られるという受難の時代になり、社会事業学部もその受難を避けることはできなかった。入学生数は減少し、社会事業学部は廃止か、名称変更かの選択を迫られた。このときの学科主任は菅支那、菅は創設の名

称を変える苦悩を抱きながらの決断は、「名を捨てて実（じつ）をとる」であった。実に名句である。戦後、社会福祉学科研究室で何か議論することがある度に、その名句が語られた。

改正後の名称は家政学部三類、4年制から3年制になり、さらに戦争末期の一九四四には家政科管理科と目まぐるしく変更されたが、戦後は社会福祉科から学制改革で4年制大学となり、家政学部社会福祉学科となった。その頃は我が国でも社会保障制度が検討され、社会福祉は国民の生活を保障する学問としてようやく国民に理解され始め、成瀬の生涯をかけた女子高等教育の理想はいち早く開花に近づき、全国的に注目される。

Ⅳ. まとめにかえて一女子高等教育の原点に社会改良がある

筆者は戦後の学制改革後の社会福祉学科に入學、卒業後も社会福祉研究を続けてきたことにより、戦後この分野で活躍して日本の社会福祉に貢献した多くの先輩に接する機会をえることもでき、その方たちから学ぶ機会が多かったと思っている。

その上で、成瀬について今認識をあらたにしているのは、女子高等教育の創始者としてだけでなく、もうひとつ、根深いところに社会改良という土台がどっしりと構えていたことである。

そのことは、日本女子大学社会福祉学科は、戦前、戦中、戦後への揺るぎない架橋となり、戦後日本の新制大学制度による教育態勢の整備、社会福祉研究、社会福祉実践をリードした態勢が、日本の社会福祉発展に貢献した歴史を誇り、さらに国際化の視点を深めることを期待する。

以上

主な参考文献（成瀬仁蔵執筆による文献のほか）

1. 日本女子大学社会福祉学科「日本女子大学社会福祉学科50年史」

2. 日本女子大学社会福祉学科「日本女子大学社会福祉学科 80 年史」2003 年
3. 日本女子大学総合研究所紀要第 5 号「日本の社会福祉発達と本学社会事業学部創設の意義に関する研究〔代表・田端光美〕。2002 年
4. 一番ヶ瀬康子「成瀬仁蔵の社会改良思想」、(一番ヶ瀬康子編『21 世紀社会福祉学』所収), 有斐閣、1995 年
5. 青木生子「いまを生きる成瀬仁蔵—女子教育のパイオニア」講談社、2001 年
6. 河村望「知られざる社会学者成瀬仁蔵」人間の科学社、2003 年
7. 中蔦邦「成瀬仁蔵」『日本歴史学会編集、人物叢書』吉川弘文館 2002 年